医療コンサルタント会社の試算を受けて

★★　外来一日30人の衝撃　★★

河北新報　2023年4月21,22日の記事より

宮城県精神科病院協会

医療コンサルタント会社の試算

富谷に移転した場合、

入院は、一日**153人**

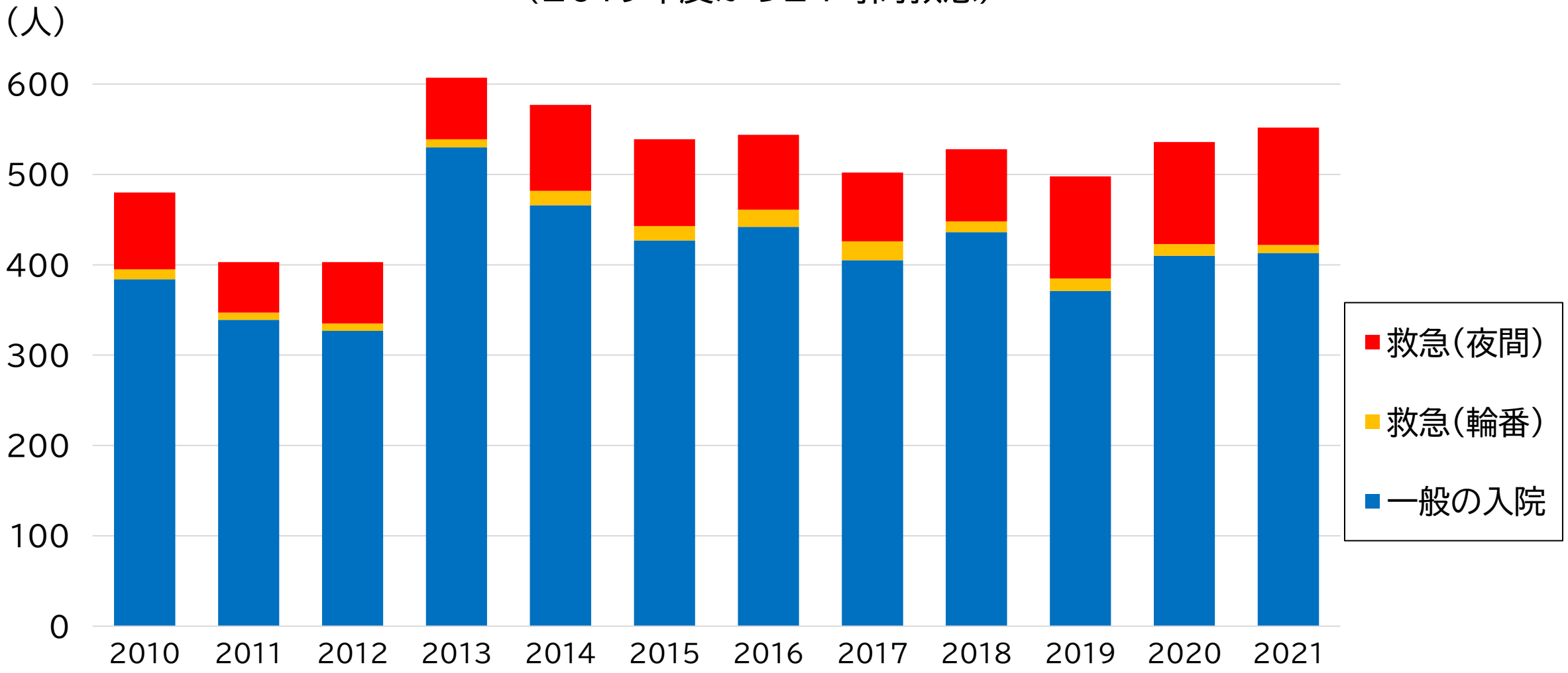
外来は、一日**30人**（2021年度の実績は一日121.3人）

- 名取市、岩沼市、亘理町、山元町で人口約17万人

  → この地域の一日の外来420人と推定

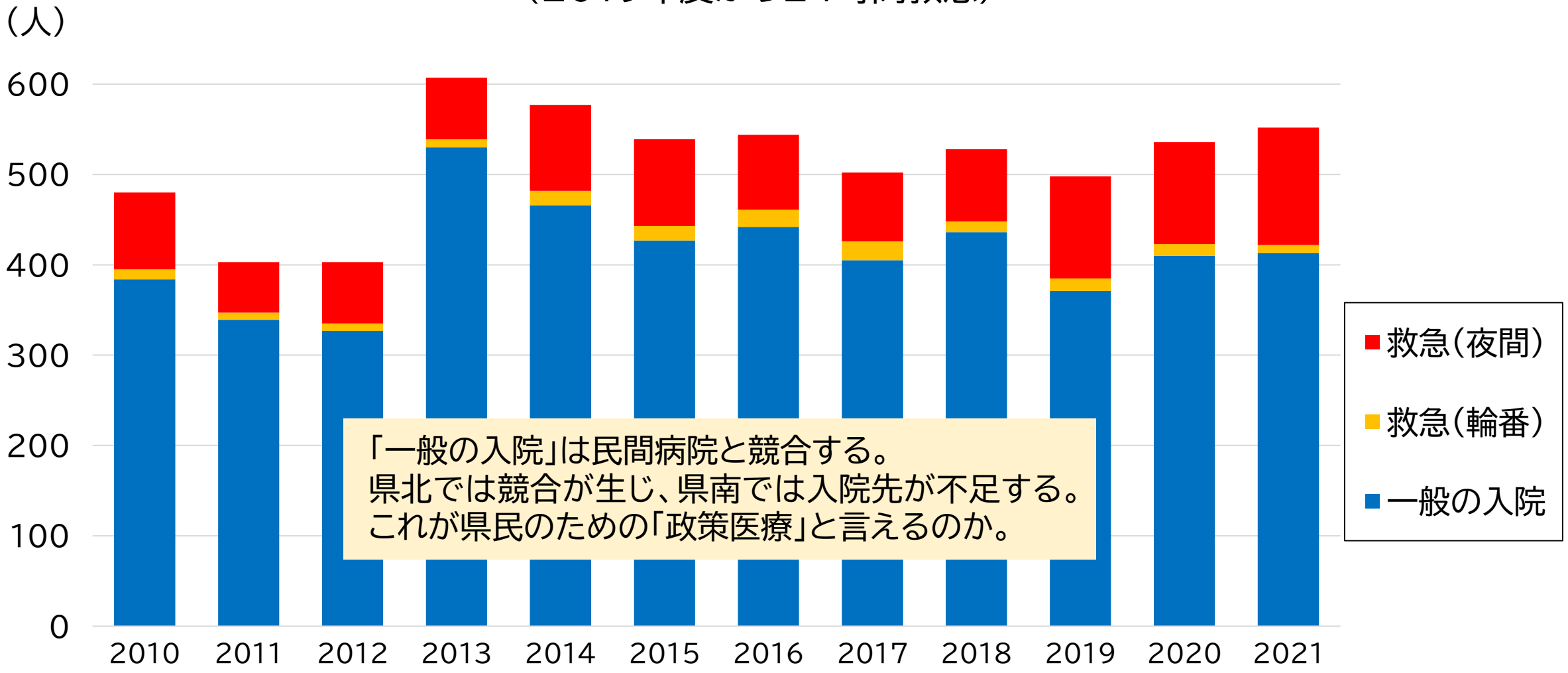
- これに仙南医療圏も含むと（人口約33万人）、一日の外来620人と推定（※ 仙台市太白区は含んでいない）
- 富谷市周辺4市町村と仙台市泉区の一部で約11～15万人 → 2040年までに外来は一日310～340人と推定（※ 名取市周辺4市町より少ない数値）

精神医療センターの年間入院患者の内訳
（2019年度から24時間救急）



「一般の入院」約400人は、**県南の患者の入院先として機能**している部分。
富谷移転後はどうなるのか？　県南から富谷に入院？　これが地域ケア？

精神医療センターの年間入院患者の内訳
（2019年度から24時間救急）

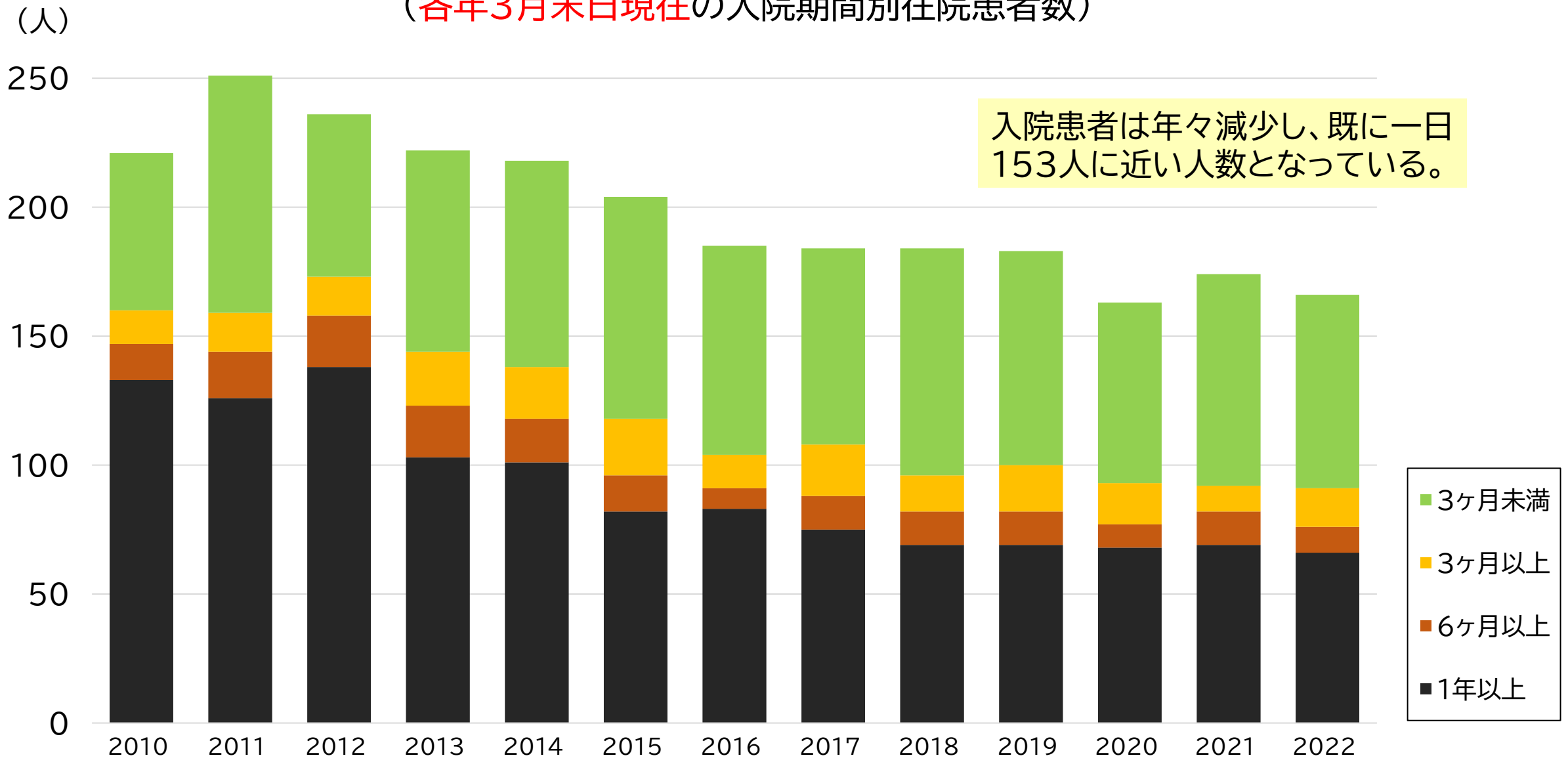


「一般の入院」は民間病院と競合する。
県北では競合が生じ、県南では入院先が不足する。
これが県民のための「政策医療」と言えるのか。

「一般の入院」は、県南の患者の入院先として機能している部分。
富谷移転後はどうなるのか？　県南から富谷に入院？　これが地域ケア？

県立精神医療センター

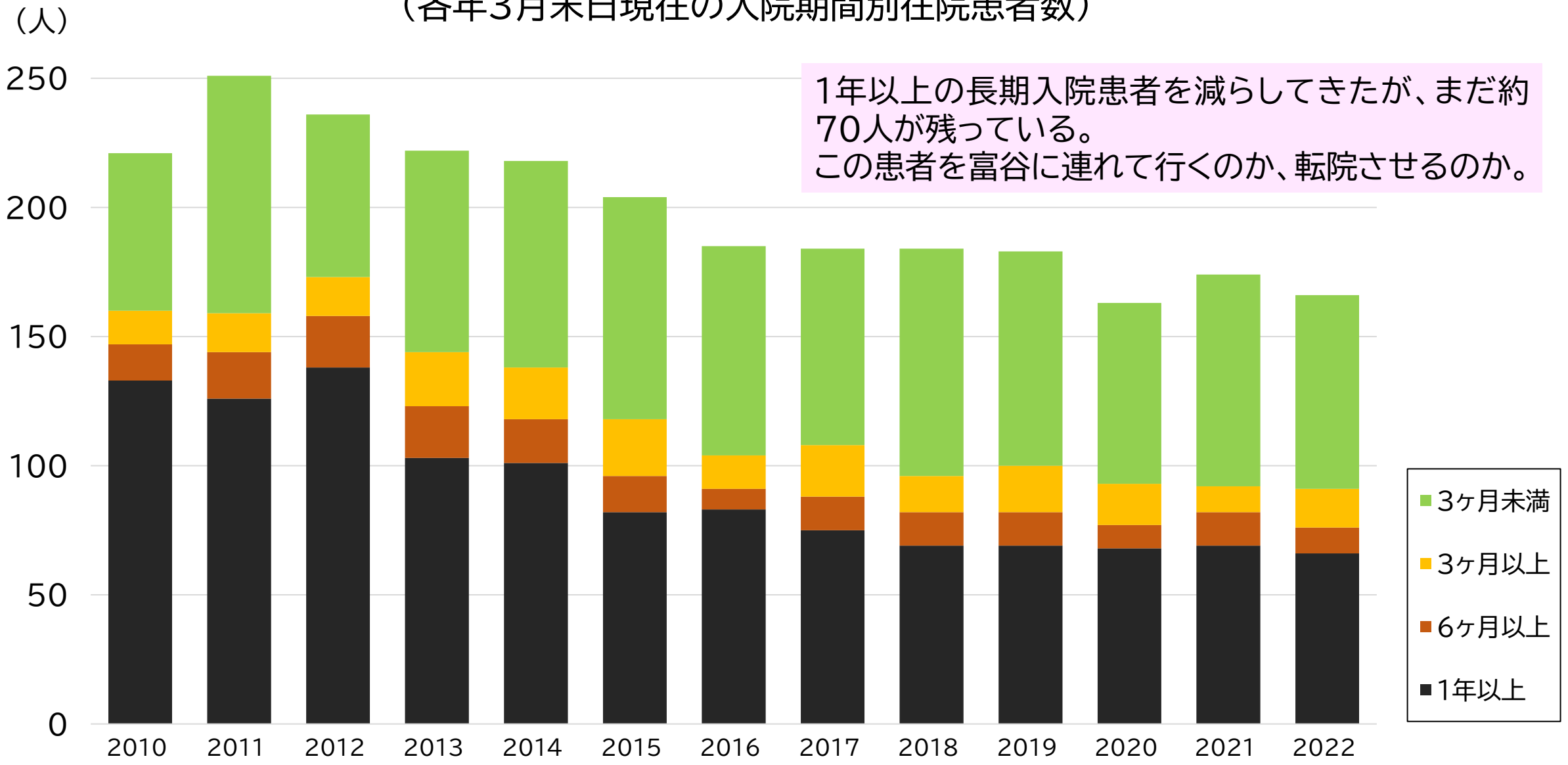
（各年3月末日現在の入院期間別在院患者数）



入院患者は年々減少し、既に一日153人に近い人数となっている。

県立精神医療センター

（各年3月末日現在の入院期間別在院患者数）

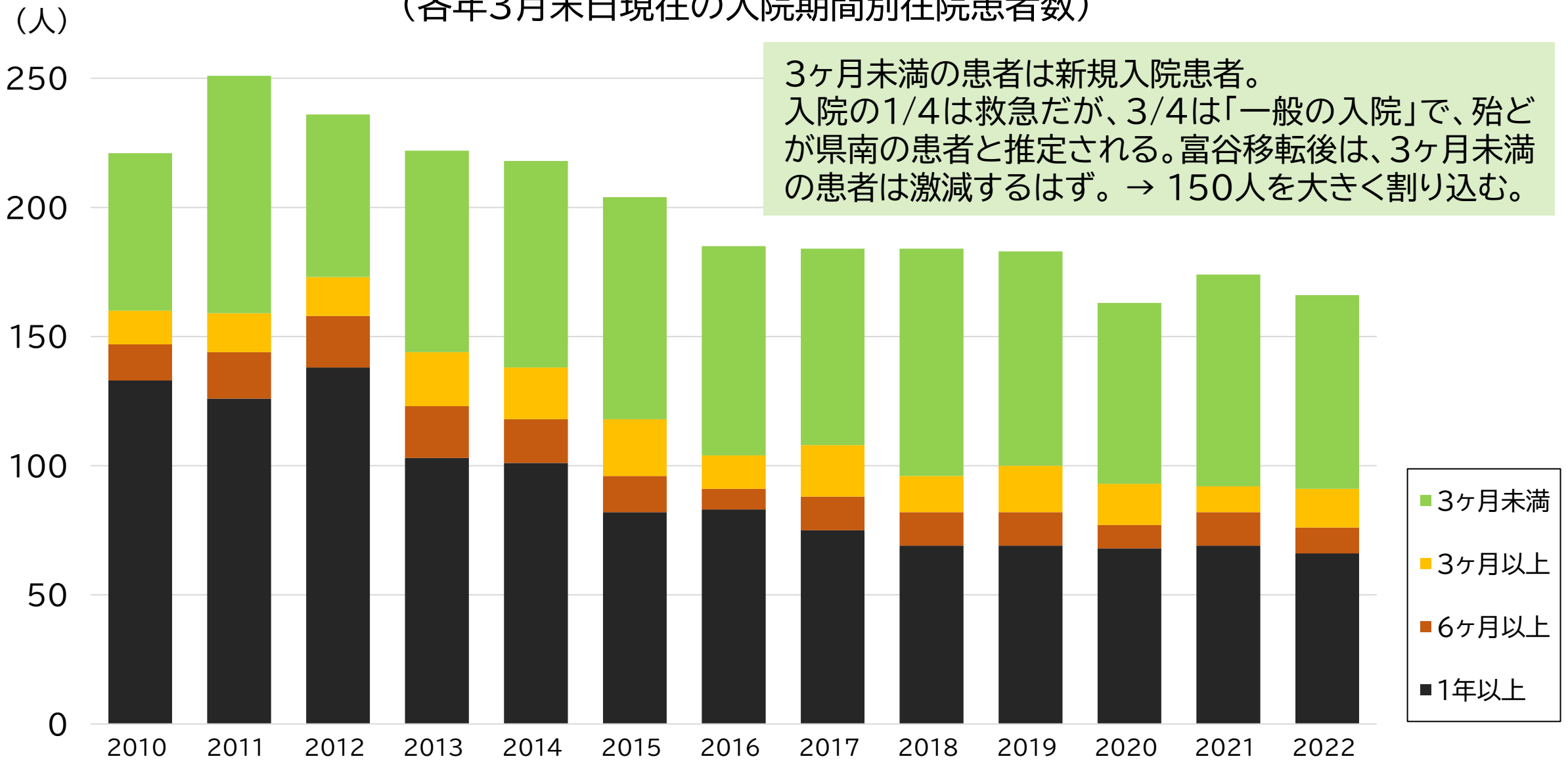


1年以上の長期入院患者を減らしてきたが、まだ約70人が残っている。
この患者を富谷に連れて行くのか、転院させるのか。

県立精神医療センター

（各年3月末日現在の入院期間別在院患者数）

3ヶ月未満の患者は新規入院患者。
入院の1/4は救急だが、3/4は「一般の入院」で、殆どが県南の患者と推定される。富谷移転後は、3ヶ月未満の患者は激減するはず。→ 150人を大きく割り込む。



県は、競合の意味を理解していない

県の答弁：「救急対応は民間病院との競合を避けるため、県北の患者は身体合併症がある場合のみ受け入れる。救急を受け入れられる病院が少ない県南の患者は身体合併症がなくても対応する。」

→　競合するのは「一般の入院」の部分であって救急の部分ではない。

精神医療センターは年間約400人の「一般の入院」を引き受けている。この多くは県南に居住する患者である。

富谷に移転した場合、県北の新たな「一般の入院」を引き受けなければ、精神医療センターは大幅な赤字を累積することになる。

県北では競合、県南では入院先の不足という、誰にとっても好ましくない状況が予想される。こんな計画を実行して良いものか。

※ そもそも県北の患者と県南の患者に差を付けてよいのか。当初の「全県カバー」から大きく後退。

外来一日30人の衝撃(1)

基幹病院たる県立病院で、一日の外来が30人で良いのか。
他県を含め、多くの基幹病院は一日100人以上を診察している。
精神医療センターの実績は一日**121.3人**だという。富谷で**30人**を診るとして、残り90人の外来はどうするのか。デイケア、訪問看護はどうするのか。

入院中心で、外来は小規模という、ひと昔前の精神科病院を連想させる。

がんセンターと仙台赤十字病院が合併する新たな病院(名取市)で精神科外来を開始するというが、所謂「総合病院精神科」の仕事は外来診療だけに限らない。院内リエゾンが新たな仕事として加わる。精神科病床がないので、緊急入院にも対応できず、入院先を探したり、紹介状の作成に追われる。地域で一貫した治療が継続できず、地域包括ケアの精神に反する。

新センターは名取に残って、従来の診療体制を継続し、身体合併症については近隣の病院との連携を図った方が、現実的かつ合理的である。

外来一日30人の衝撃(2)

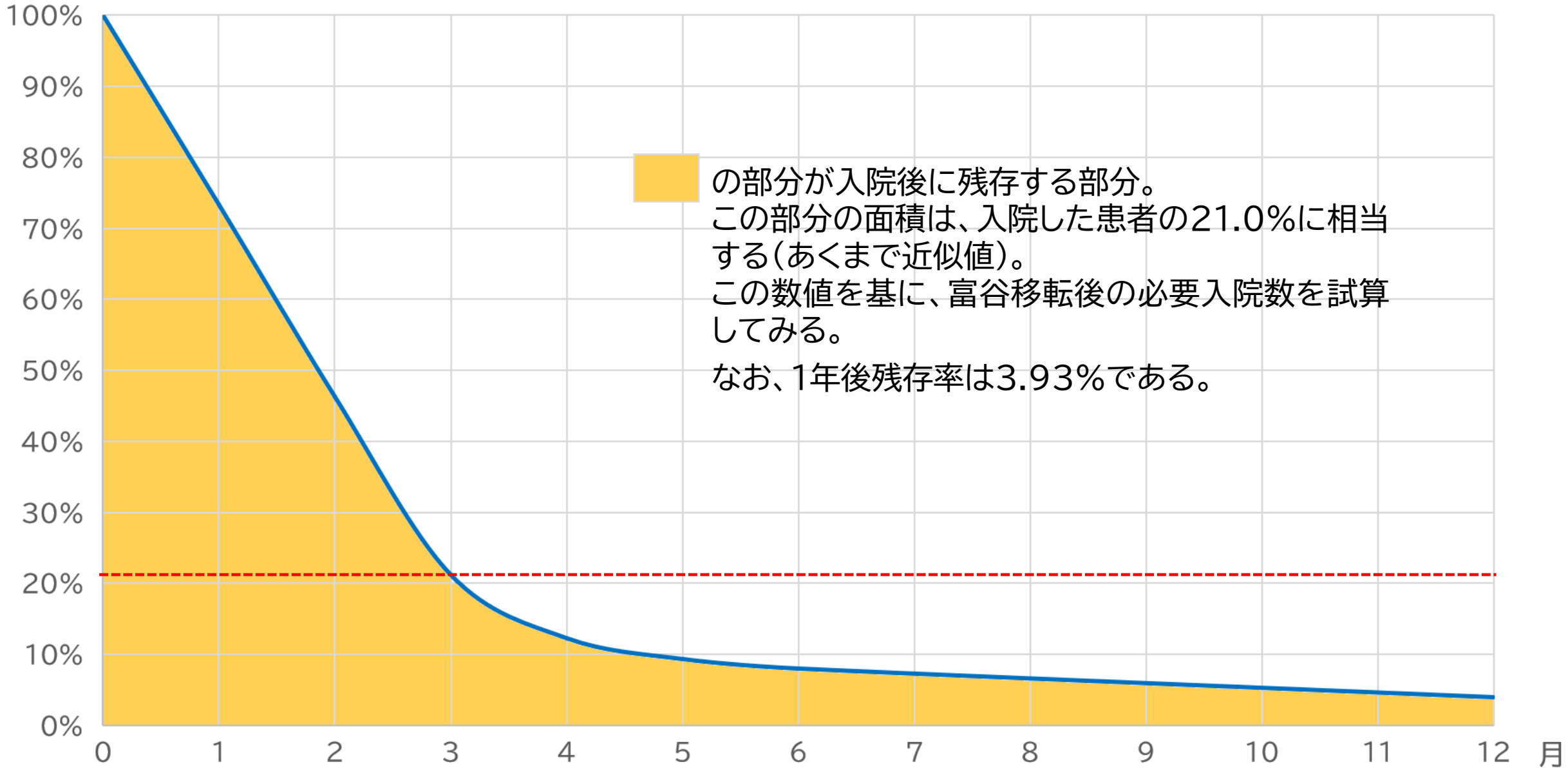
一日の外来30人という試算は、そもそも富谷市周辺に精神科の患者が多くないことを示唆する。つまり、この先長期的に見て、この地域の新規入院の増加は望めない。民間と競合しない限り、富谷市周辺からの入院患者の増加は期待できず、県立と民間双方にとって好ましくない状況に陥る。

県南からの入院を引き受けるというが、地域包括ケアの観点からは望ましくない。また、名取に開設するという精神科外来は多大な負担を強いられる。

入院規模を一日153人と試算しているが、長期的にはこれより低くなる可能性が高い。結果的に、新センターは今以上に赤字を累積させると予想される。(新規入院患者の減少、外来収益の大幅な減少、収益率の高い精神科デイケアの収入減、人件費比率の増大、etc)

富谷移転は経営的にもデメリットが大きく、県の財政を更に圧迫する。

精神医療センターの退院患者から見た残存曲線
（24時間救急を開始した2019～21年度の3年間）



1日153人の入院を確保するために必要な入院患者数(推計)

① 1年以上入院している患者を連れずに富谷に移転した場合
② 1年以上入院している患者70名を連れて富谷に移転した場合

年間入院患者数	①	②
400	104	149
450	112	161
500	125	174
600	150	199
700	175	224

②の場合、1年以上入院から退院する数と、入院1年後にまだ退院できず残存する数を考慮した。
①の場合には、1年以上入院から退院する患者はいないことを想定した。

①の場合は年間600人、②の場合は年間400人の入院がないと、1日153人の入院を確保できない。
センターの救急(昼と夜の計)は2019～21年で、各年127，126，139人であるから、救急以外の患者の入院が必要で、地域の民間病院と競合する。県南の患者を入院させるといっても、入院に同意するとは限らない患者を25km離れた富谷まで連れて行くのは極めて困難。名取市内に残れば、そのまま入院できるのに。